

聖書:ルカの福音書2章36~40節

説教:贖いを待ち望む人々に

はじめに

四本のろうそくに火が灯され、クリスマス礼拝を迎えております。前回までサムエル記第二を開いてきました。少しだけおさらいをします。ダビデが自分の王としての権威を誇るために神の箱を利用するという罪を犯しながらも、やがて彼が罪を悔いて主に立ち返ったとき、やがて来られる救い主は卑しい姿になられるということを学びます。そんな後のことです。「ダビデの子孫から救い主が生まれる」という驚くべき約束をダビデはいただく。イスラエルの民は、このみことばを信じてずっとダビデの子孫として来られる救い主を待ち望むようになった。そういうことを見てきました。

さて、救い主が来るのはよいとして、いったいいつ来るのか、どんな背格好をしているか、実は聖書にはほとんど書いていない。いつ来るのか、どんな姿かもわからない。それでも待つというのは、なかなか大変なことです。ところがユダヤ人は待った。どれだけ待ったか。千年待った。驚くべき忍耐力です。今日はずっと救い主を待っていた一人の女性に目を留めながら、三千年前に人として来られた救い主についてを考えていきます。

1 エルサレムの贖い

1) アシェル族の女預言者アンナ

この女性のことについては、36節でこう紹介されています。「アシェル族のペヌエルの娘で、アンナという女預言者」だった。アンナはこのとき八十四歳でした。結婚してわずか七年で夫を亡くし、それ以来ずっとやもめのままで神に仕えてきました。預言者という働きはあったにせよ、特別に人々の注目を浴びることもなくひっそりと暮らしてきた。そんな女性がアシェル族の出身であったとわざわざ強調されるのには、なにか訳があるのではないかと思うのです。このことはまた最後のところで触れることにします。

2) 幼子のことを

アンナは夫と死に別れて以来、神に仕えながら宮に集まつてくる人たちのなかにもしかして救い主がいるのではないか。そんなふうにしておよそ六十年間待ち続けた。そんなある日、幼子が母親の腕に抱かれて宮に入って来ます。その時の様子が38節です。「ちょうどそのとき彼女も近寄つて来て、

神に感謝をささげ、エルサレムの贖いを待ち望んでいたすべての人に、この幼子のことを語った。」この幼子こそが救い主イエス・キリストです。律法にしたがつて、両親が生まれてまだ八日目になつたばかりのイエスを主に献げるためと、いけにえを献げるために神殿に来たところでした。いつ来るかわからない、どんな姿なのかもわからない。それなのにアンナは、迷うことなく救い主を見つけ出して近寄っていく。砂の中から一本の針を探すようなものですから、ふつうならありえない話でしょ。アンナの祈りに主が応えてくださいました。

3) エルサレムの贖いを待ち望む人たちに

今もそうですが、聖書の時代も女性一人が生きていくということは大変でした。つらい世間から逃れ、自分ひとり安心できる所として神に仕える道を選んだのかとも思ったりします。実際はそうではない。アンナは幼子のことをだれに語ったでしょう。エルサレムの贖いを待ち望んでいたすべての人に語りました。自分だけ幸せであれば良い、と思っていない。多くの人が幸せになって欲しい。約束の救い主が来られたこの喜びをみんなと分かち合いたい。そのことをずっと祈ってきたのです。

いま「みんなと分かち合いたい」と言いましたが、正確には「エルサレムの贖いを待ち望んでいたすべての人に」と書いてあります。どうしてこんな表現をするのでしょうか。これにもなにか理由がありそうです。

2 賦いを待ち望む

1) ダビデ、イザヤ

調べてみると、イザヤ書52章9節にたどり着きます。そこにはこう書いてある。「エルサレムの廃墟よ、ともに大声をあげて喜び歌え。主がその民を慰め、エルサレムを贖われたからだ。」「エルサレムの廃墟」とあるので、町が廃れてしまったとか、寂れてしまったということではありません。聖書はあくまでも人の救いについて書かれている書物です。「エルサレム」ということばを、「すべての人々」と言い換えるとわかりやすい。主が私たちを慰め、贖いによって罪から救ってくださる。イザヤはそのような約束を語りました。主はダビデに、救い主はダビデの子孫から世継ぎの子として起こされていくのだとも語りました。

2) 信じて待つ

このみことばをずっと信じて待ち望んでいたアンナは、この幼子に出会い、救い主であると信じました。では、ほかの人たちはどうだったのでしょうか。アンナは、この方が救い主ですと告げましたが、みんなは素直に信じたのでしょうか。確かに信じた人たちはいました。長年の身体の障がいで苦しんでいる人たちをイエスが癒やし、悪霊を追い出すという奇跡を見た人たちは、熱狂するようにしてイエスの所に集まりました。けれどもそれは、奇跡というところだけ切り取り、「すばらしい」と言って大いに持ち上げていただけだったのです。そんな人たちは、イエスが逮捕され、十字架につけられるとどうなったでしょう。昨日までイエスを持ち上げていた人たちが、こんどは手のひらを返すようにイエスをののしり、蔑みました。

神は、ダビデやイザヤを通して救い主が来されることを語りましたが、それがいつなのか、どんな姿をしているかは語りませんでした。不親切だと思ったかもしれません。神はご存じだったのです。たとえ親切に教えたとしても、人々は救い主を十字架につけてしまうのです。ですからいつどのようにしてと教える意味がない。ただアンナのように、心から救い主を待ち望む者にわかる。そのようなお姿で救い主は現れてくれました。

3 イエス・キリスト

1) 死の先にある永遠のいのち

アンナは、長年待ち望んでいた救い主を肉の目で見ることができました。世間並みに八十四歳まで生きたし、望みもかなえられたし、これでいつ死んでも心残りはない。それで神に感謝をしたように見えますがただそれだけだったのか。もう少し深く考えたい。

「エルサレムの贖いを待ち望む」とわざわざ書かれていることに目を留めます。聖書で贖いというとき、奴隸状態にあった者をお金を出して買い戻し、自由の身にする、それを贖いといいます。私たちは罪と言う縄目に縛られた奴隸状態にあって、罪の報酬である死というもので絶望し苦しんでいる。それが私たちの姿。神はそんな私たちを罪という奴隸状態から救うために、私たちのところへ来られ、十字架で私たちの罪を贖ってくださった。罪の代価を代わりに払ってくださる。この幼子が、やがてそのような大きなみわざを成し遂げてくれる。それが聖書が語る救いという意味です。

大切なのはその先です。イエス・キリストによって私たちの罪が贖われた結果、何が起こるか。私たちのこの肉体はいつか滅びます。しかしイエス・キリストが罪の贖いをして下さったのであるならば、私たちを苦しめていた死はもはや意味がないことになる。イエス・キリストが、私たちに永遠のいのちを与えてくださる。肉体は滅んだとしても、もういちど新しいからだをいただきて、私たちはよみがえることができる。そうして私たちの本当の故郷である天の御国に招かれて行く。アンナは、幼子を通してそのことを教えてもらった。だからもう心残りはない。それで神に感謝したのです。

2) 約束の真実

そんな恵みをいただいたアンナがアシェル族の出身だったと、わざわざ書いているのはどうしてか。そのことに最後に触れておきます。その答えは創世記49章20節にあります。高齢となったヤコブが息子たちの将来について語った中にこうあるのです。「アシェルには、その食物が豊かになり、彼は王のごちそうを作り出す。」王とは、イスラエルの王としてクリスマスにお生まれになったイエス・キリストのこと。この預言のとおりに、アンナは「エルサレムの贖いを待ち望んでいたすべての人々に、幼子のことを語ることによって王のごちそうを作ることになりました。ヤコブを通して語られた主の約束は、このようにして成し遂げられていく。

みことばの約束のとおりに、卑しい姿となられて私たちのところへ来られた主の御名をあがめます。